

主の回復における唯一の働き

(土曜日——午前の第一の部)

メッセージ 7

主に対して務めをし、主を隠されたマナ、芽を出した杖、命の法則として享受する

聖書：エゼキエル 44:10-11, 15-18, 使徒 13:1-2, ヘブル 9:3-4

- I. 「イスラエルが迷ったとき、わたしから遠く去って行き、自分たちの偶像を慕ってわたしから迷い出たレビ人は、自分たちの罪科を負わなければならない。彼らはわたしの聖なる所で務めをし、家の城門で見張りをし、家で務めをしなければならない。彼らは民のために全焼のささげ物と犠牲をほふり、彼らの前に立って、彼らに対して務めをしなければならない。……しかし、ザドクの子たちであるレビ人の祭司たち、すなわちイスラエルの子たちがわたしから迷って行ったとき、わたしの聖なる所の任務を守った者は、わたしに近づいて来て、わたしに対して務めをし、わたしの前に立って、脂肪と血をわたしに献げなければならないと、主エホバは告げられる。彼らはわたしの聖なる所に入り、わたしの食卓に近づいて来てわたしに対して務めをし、わたしの任務を守る」——エゼキエル 44:10-11, 15-16：
- A. 神の目に、ただ家に対する務めがあるだけではありません。さらにまさった務め、すなわち、主に対する務めがあります。
 - B. 神にはただ一つの目標があります。それは完全に「わたし」に属している人を得ることです。言い換えれば、彼はわたしたちが「わたし」の臨在の前におり、「わたし」に対して務めをすることを欲しています。神の唯一の目標は多くの事柄にあるのではなく、「わたし」にあります——15-16 節。
 - C. 主に対して務めをすることは、わたしたちが家を見捨てることを意味したものではありません。主に対して務めをする人たちはまた、福音を宣べ伝えて罪人を救い、兄弟姉妹を助けて前進させます。しかし、彼らの一つの目標は主のためであり、彼らの焦点は主ご自身です。彼らは完全に主のために人を尊びます。
 - D. わたしたちは主の臨在に来て、ただ彼だけを見つめるなら、自然に兄弟姉妹に対しても務めをすることができるようになります。わたしたちが主に対して務めをしているかどうかという質問は、主がわたしたちの心の中で第一位を占有しているかどうかにかかっています。
 - E. わたしたちが主の奉仕において行なうことは何であれ、主のためであるべきです。それは彼の満足、彼の心の願い、彼の幸い、彼の目標、彼の喜び、彼の栄光のためであるべきです。
 - F. 主の働きにも、わたしたちの肉を引き付け魅了する領域があります。なぜなら、それらはもっぱらわたしたちの自己の喜びと栄光のためであるからです——参照、II コリント 4:5。
 - G. だれも、祈りの中で彼に近づき、近寄ることなしに主に対して務めをすることはできません。霊的な力は、宣べ伝える力にあるのではなく、祈る力にあります。

どれほどわたしたちが祈るかは、どれほどわたしたちが内なる力を真に持っているかを示します。

H. わたしたちは至聖所において主に対して務めを行なうことを欲するなら、主の御前で時間を費やし、さらに多く祈らなければなりません。わたしたちは彼に近づき、彼の御前に立ち、彼のみこころを待ち望む必要があります。

I. 祈ることは、神の御前に立つことです（エゼキエル 44:15）。それは彼の御前で彼のみこころを尋ね求めて、^{ごうまん}傲慢の罪から救われることです（詩 19:13）。

J. 主に対して務めをする者たちは、脂肪と血を彼に献げなければなりませんでした——エゼキエル 44:15：

1. ささげ物の脂肪はキリストのパー孙の尊さを予表しますが、血はキリストの贖いの働きを表徴します。

2. わたしたちの神に対する奉仕において、わたしたちは両方とも彼に献げなければなりません。血は神の聖、義のためであり、脂肪は神の栄光のためです。

K. 主に対して務めをする者たちは亜麻布の衣服を着なければならず、毛織り物を身に着けたり、汗の出るような物を身に着けたりしてはなりませんでした——17-18 節：

1. 亜麻布の衣服は、命を与える霊の中での、キリストの命による日常生活と歩みを表徴します。そのような生活と歩みは、純粹で、清く、細やかです。

2. 毛織り物は祭司たちに汗を出させました（18 節）。それは墮落した人が神のろいの下で、神の祝福がなく、自分自身の能力と力によって労苦するというしるしです（創 3:19）。

3. 汗が出る働きとは、人の努力から生じる働きであり、父なる神からの祝福がありません。主に対して務めをする人はみな、汗が出ない働き、人の努力や肉力的な力のない働きを行なわなければなりません。

4. わたしたちが神の臨在の中で十分な時間を費やし、彼と適切にやりとりを持つなら、人の前で汗を出す必要はありません。わたしたちは最小の力をもって最大の働きを成し遂げることができます。

L. 「さて、アンテオケの地に在る召会には……預言者たちと教える者たちがいた。彼らが主に仕え [主に対して務めをし]、断食していた時、聖霊が言われた、『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び分け、わたしが彼らを召した働きに当たらせなさい』」——使徒 13:1-2：

1. これは新約の働きであり、新約の働きに対する唯一の原則です。それは、主に対して務めをする時にのみ、聖霊の働きは啓示されることができるということです。

2. 主に対して務めをする時にのみ、聖霊は人を遣わします。わたしたちが主に対して務めをするを最優先にしないなら、すべてのことは順序が狂ってしまいます。聖霊だけが人に働くように遣わす権威を持っています。

3. 主に対して務めをするとは、外側でのすべての働きを捨て去ることではありません。そうではなく、外側でのすべての働きは主に対するわたしたちの務め

に基づいているべきです。

- わたしたちは主に対するわたしたちの務めから出て行くのであって、わたしたち自身の願いからではありません。それは主に対する務めにおいて何の根拠もありません。

II. 「また第二の幕の後ろにある幕屋は、至聖所と呼ばれています。そこには……全面、金で覆われた契約の箱が有って、その中には、マナが入っている金のつぼと、芽を出したアロンの杖と、契約の板とがありました」——ヘブル 9:3-4 :

A. 隠されたマナは、わたしたちと神との間に隔たりがないときに、神の臨在の中でわたしたちが享受するキリストの分け前です。わたしたちと主との間に隔たりがないとき、わたしたちは最も親密で隠された方法でキリストを享受します。これが隠されたマナ、隠されたキリストの分け前を享受することです——出 16:31-36 :

- ペルガモに在る召会における状態に勝利を得ることは、今日のキリスト教の一般的な実行からわたしたち自身を分離し、神の臨在の中にとどまって他の何にでもなく、直接神に対して務めをすることです。ここでわたしたちはキリストからのものを享受します。それは彼の臨在から遠く離れているすべての者が味わうことのできないものです——啓 2:17。
- わたしたちが隠されたマナを享受したいなら、わたしたちと神との間に隔りがあってはなりません。わたしたちと主との間の隔りはすべて除き去られなければなりません。
- わたしたちは主に対して務めをし、彼を隠されたマナとして享受するとき、彼との直接の交わりを持ち、彼の心と意図を知ります。主の臨在の中で、わたしたちは彼をもって、彼の意図をもって、彼がわたしたちに行なってほしいすべてのことをもって、委託されることができます。
- わたしたちは主に対して務めをするとき、神の委託を持ちます。なぜなら、わたしたちは神の臨在の中におり、わたしたちと神との間には何の隔りもないことを認識しているからです。

B. 芽を出した杖は、復活した方であるキリストを表徴し、わたしたちの命、わたしたちの生活、わたしたちの内側にある復活の命であるべきです。この命は芽を出し、開花し、実を結んで円熟すべきです——民 17:8 :

- イスラエルの子たちが反逆した後、民数記第 16 章において記録されているように、神は十二人の族長たちにイスラエルの十二部族にしたがって十二本の杖を取り、それらを証しの天幕の中にある契約の箱の前に置くように命じました。それから彼は言われました、「わたしが選ぶ人の杖は芽を出す」——17:5。
- 十二本の杖はすべて葉がなく、根がなく、乾いており、枯れて、死んでいました。芽を出した杖はどれであれ神によって選ばれた杖でした。ここでわたしたちが見るのは、復活が神の選びの根拠であるということと、奉仕の根拠がわたしたちの天然の命の外にあるものであるということです。こういうわけで、芽を出した杖が表徴するのは、わたしたちが復活のキリストを経験して、神に受け入

れられ、神の与えられた務めにおいて權威を持つということです。

3. あらゆる奉仕の原則は、芽を出した杖にあります。神は十一本の杖をすべて族長たちに戻しましたが、アロンの杖を契約の箱の中に保存し、永遠の記念としました。これが意味するのは、復活が神に対するわたしたちの奉仕における永遠の原則であるということです——9-10 節：
 - a. 復活が意味するのは、すべてのものが神からであって、わたしたちからではないということです。それが意味するのは、ただ神だけができ、わたしたちはできないということです。
 - b. 復活が意味するのは、すべてのことが神によってなされるのであって、わたしたちによってなされるのではないということです。復活を認識している人はみな、自分自身の望みを放棄しており、自分ができないということを知っています。
 - c. 天然の力が残っている限り、復活の力は現されることができません。サラが自分で産むことができる限り、イサクはやって来なかったでしょう——創 18:10-15. 21:1-3, 6-7。
 - d. わたしたちができることは、天然の領域に属します。わたしたちができないことは、復活の領域に属します。人は自分自身が終わらされなければなりません。そうしてはじめて、人は自分が全く役に立たないことを確信します——マタイ 19:26. マルコ 10:27. ルカ 18:27。
 - e. 人は自分自身にできないことを認識したことがないなら、決して神にできることを経験することはできません。復活が意味するのは、わたしたちができないということと、神がすべてのことを行なった方であるということです——参照、Ⅱコリント 1:8-9, 4:7。
- C. 契約の板、すなわち、律法の板が表徴するのは、神聖な命の法則、すなわち、神聖な命の自然な力、自動的な機能、本来の能力、神聖な性能です——エレミヤ 31:33, ヘブル 8:10. 参照、ローマ 8:10, 6, 11, 10:12-13：
 1. 命の法則、この神聖な性能は、わたしたちの中ですべてのことを行なって、神のエコノミーを完成することができます：
 - a. この性能にしたがって、わたしたちは神を知り、神を生き、神の命と性質において神をもって構成されることができます。それはわたしたちが彼の増し加わり、彼の拡大となり、彼の豊満となって、彼を永遠に表現するためです——エペソ 1:22-23, 3:19-21。
 - b. さらに、命の内なる法則の性能は、わたしたちをキリストのからだの肢体に構成し、あらゆる種類の機能を持たせます——4:11, 16。
 2. 神聖な命がわたしたちの中で成長するとき、命の法則は機能してわたしたちを神の長子であるキリストのかたちに形づくり、同形化します——ローマ 8:2, 29：
 - a. 命の法則は間違ったことを行なうことを規制するものではありません。それは規制して命を形成します。

- b. 命の法則が機能するのは、おもに消極的な面でわたしたちに何を行なわないかを告げることにあってではありません。そうではなく、命が成長するとき、命の法則は積極的な面でわたしたちをキリストのかたちに形づくり、同形化することにおいて機能します。
- c. 命の法則の機能を通して、わたしたちはみな神の円熟した子たちとなり、神はご自身の宇宙的な表現を得ます。

務めからの抜粋：

復活とは何か？

今わたしの質問はこうです。復活とは何でしょうか？ 復活とは、わたしたちの天然の命からでないもの、自己からでないもの、わたしたちの能力に基づいていないものすべてです。復活とは、わたしたちを越えるもの、わたしたちが自分自身ではできないものについて語ります。杖に花を彫刻したり、色を塗ったりすることはできても、だれもそれに芽を出させることはできません。何十年か使った後、芽を出して花が咲いたという杖を、わたしたちは聞いたことがありません。これは神の働きです。世の女の人はかつてだれも、胎が閉ざされた後、子供を産んだことはありませんが、サラはイサクを産みました(ローマ 4:19)。これは神の行ないでした。ですから、サラは復活を予表します。復活とは何でしょうか？ 復活とは、人が自分自身によっては何もできないこと、神を通してのみできることを意味します。それは、自分自身によるのではなく、神によることを意味します。復活とは、人が自分は何であるかを無視して、神が何であるかに信頼することです。あなたが他の人より聡明であったり雄弁であったりすることは、ほとんど重要ではありません。あなたに霊性があるなら、この霊性はあなた自身に基づくのではなく、あなたの中の神の働きに基づくのです。仮にアロンが愚かにも他の人にこう言うとし、**「わたしの杖はあなたがたの杖とは異なります。わたしの杖はより滑らかで、より輝いており、より真っすぐです。こういうわけで、それは芽を出したのです」**。それは何と愚かで分別がないことであつたでしょう！ もしわたしたちが一瞬でも、自分は他の人と異なっていると考えるなら、それは最も愚かな考えです。たとえわたしたちの中に異なっているものがあるとしても、それは神の働きの結果です。復活は、すべてのものが神から出て来ることを意味します。

「イサク」という名は、「笑う」を意味します。なぜアブラハムは自分の子を「笑う」と呼んだのでしょうか？ 彼がイサクと呼んだのには二つの理由があります。第一に、神はアブラハムに、サラが男の子を産むと約束しました。サラはこれを聞いたとき、笑いました。サラが笑ったのは自然でした。彼女は自分自身を見つめたとき、笑わざるを得ませんでした。彼女の子供を産む時は過ぎており、彼女の胎は閉ざされていました。どうして彼女は子供を産むことができたのでしょうか？ 彼女は、これは不可能であると思いました。ですから、神がアブラハムに、彼女は子供を産むと告げるとき、彼女は笑ったのです。第二に、サラは一年後に男の子を産んだとき、本当に喜び

で笑ったのです。このゆえに、神はその子供の名を「イサク」と呼びました(創 18:10-15, 21:1-3, 6-7)。それは「笑う」を意味します。一度目に彼女が笑ったのは、その約束が不可能であったからです。二度目に彼女が笑ったのは、驚くべきことにそれは可能であることを見いだしたからです。人は一度目の笑いを経験したことがなければ、決して二度目の笑いを経験することはできません。人は自分自身の無能を認識したことがなければ、決して神の能力を経験することはできません。サラは自分自身を知っていました。彼女は自分自身についての全き認識を持っていました。彼女は、自分にはそれができないことを知っていました。しかし、彼女は神の働きを見ると直ちに、笑うことができました。復活とは何でしょうか？ 復活とは、わたしたちが自分自身の中に持っていないものを、神がわたしたちに与えてくださったことを意味します。聖書は何度も、人は自分自身でできないことを証ししています。しかし多くの人は、自分はできていると思っています。奉仕の事柄において、もしある人が自分自身のことを真に笑って、「わたしにはできません」と言うなら、自分自身が再び笑っているのを見いだして言うでしょう、「わたしはそれを行なえませんでした。わたしは自分のことをよくよく知っています。主がわたしに代わって行なってくださいました」。わたしたちの中にどんな権威の現れがあっても、わたしたちは主に言うべきです、「あなたがこれをなさった方です。それはわたしの事ではありません」。復活とは、あなたにはできないこと、神がすべてをなしてくださった方であることを意味します。

復活は奉仕の永遠の原則である

あらゆる奉仕の原則は、芽を出した杖にあります。神は十一本の杖をすべて族長たちに戻しましたが、アロンの杖を契約の箱の中に保存し、永遠の記念としました。これが意味するのは、復活が神に対するわたしたちの奉仕における永遠の原則であるということです。主のしもべは死んで復活した者です。神は何度もご自身の民に、神に仕えるための権威は復活の中にあるのであって、人自身にあるのではないと証しされます。主に対するすべての奉仕は、死と復活を経過しなければなりません。そうしてはじめて、それらは神に受け入れられます。復活が意味するのは、すべてのものが神からであって、わたしたちからではないということです。それが意味するのは、ただ神だけができ、わたしたちはできないということです。復活が意味するのは、すべてのことが神によってなされるのであって、わたしたちによってなされるのではないということです。すべて自分自身を高く考える者や、自分自身について誤った判断を持っている者は、復活が何であるかを決して認識したことがありません。だれも、自分自身で何でもすることができると間違っただけで考えてはなりません。もし人が、自分ができる、何かを行なうことができる、役に立つと思いつけるなら、復活を知りません。彼は復活の教理、復活の理由、復活の結果を知っているかもしれませんが、復活を知りません。すべて復活を知っている人は、自分自身に望みを捨てています。彼らは、自分にはできないことを知っています。天然の力が残っている限り、復活の力には現す立場がありません。サラが子供を産むことができる限り、イサクはやって来なかったでしょう。わたしたちができることは、天然の領域に属します。わたしたちが

できないことは、復活の領域に属します。

神の能力は、彼の創造においてではなく、復活において現されます。神の最大の力は、創造を通してではなく、復活を通して現されます。神の力が創造において現される時、死が先に来る必要はありません。しかし神の力が復活において現される時、死が先に来る必要があります。すべて創造されたものは、その創造のために先立つものを必要としませんが、すべて復活の中にあるものは、それに先立つものを必要とします。もし人が本来持っていたものによって生きることができるなら、何も復活を経験していません。もし人の能力が、本来持っていたものによるのであれば、その人は復活を持っていません。もし人が本来の自分であるなら、復活を持っていません。もし人が持っているものが、本来持っているものであれば、彼は復活を持っていません。わたしたちは、自分には何もできず、無であり、何も持っていないことを認めなければなりません。わたしたちは死んだ犬のようです。わたしたちがこれを認めるなら、わたしたちの中で何かが生きていることを見いだします。それが復活です。創造は死の認識を必要としませんが、復活は、わたしたちが倒れ伏し、神の御前にひれ伏し、彼にこう告白することを必要とします、「わたしは何もできません。わたしは無であり、何も持っていない。わたしはこのような人です。もしわたしが他の人に何かを与えることができるのであれば、それはあなたがわたしに与えてくださったからです。もしわたしが何か行なうことができるのであれば、それはあなたがわたしを通してなされたからです」。いったんわたしたちが主の御前でこのようにひれ伏すなら、わたしたちが持っているすべては、わたしたちの中で神の働きとなるでしょう。今後、わたしたちは決して間違わないでしょう。すべて死んでいるものはわたしたちのものであり、すべて生きているものは神のものであることを、わたしたちは認識するでしょう。わたしたちは、自分自身を主からはっきりと分離しなければなりません。すべて死と関係のあるものはわたしたちのものであり、すべて命と関係のあるものは主のものであります。主は決して混同しませんが、わたしたちはしばしば混同します。人は自分自身の終わりにもたらされなければなりません。そうしてはじめて、自分が全く役に立たないことを確信するでしょう。サラはイサクを産んだ後、自分自身の力に基づいていたと考えるほど愚かではありませんでした。子ろばは、ホサナは自分に向けられていると間違えて考えませんでした。何が神のもので、何がわたしたちのものであるかについて、わたしたちがもはや混同することがなくなる程度にまで、神はわたしたちをもたらさなければなりません。

すべて権威である人は、これを知っているべきであり、決して間違っはなりません。権威について間違いがあってはなりません。権威は神からのものであって、わたしたちからのものではありません。わたしたちは権威を守る人にすぎません。これを見た人だけが、代理権威となる資格があります。兄弟姉妹、あなたは働きに出るとき、自分自身の中に何か権威があると愚かにも思うことがないように、わたしは望みます。あなたは復活の原則を妨げると直ちに権威を失います。あなたは自分の権威を展覧しようとする直ちに、権威を失います。枯れた杖は、死を展覧することができるだけです。しかしあなたは復活を持つとき、権威を持ちます。なぜなら、権威は復活

に基づいているのであって、天然の命に基づいているのではないからです。すべてわたしたちが持っているものは天然のもので、このゆえに、権威はわたしたちに基づいているのではなく、主にに基づいているのです。

宝と土の器

コリント人への第二の手紙第4章7節のパウロの言葉は、ここの教えと符合します。パウロはこの章ですばらしい絵を描いたと、わたしはいつも思います。パウロは自分を土の器に、すなわち粘土から作られた器にたとえています。彼は、自分の中にある復活の力を宝にたとえました。これは石膏^{せっこう}のつぼの中の高価な膏油のようなものです。彼は、自分が土の器にすぎないことをよく知っていました。しかし彼の内側の宝は卓越した力でした。この二つの事柄の間に大きな違いがあります。パウロは、この復活の力は宝であり、それは超越して偉大な力であると言いました。これは真に誠実な人の言葉です。パウロは、それは「卓越した力」であると言いました。これに続いて彼は、四方から圧迫されるが、宝のゆえに窮することはないと言いました。彼は自分自身の中では、逃れる道がありませんでしたが、宝があるので、出る道が全くないではありませんでした。彼は自分自身の中では迫害されましたが、宝があるので見捨てられませんでしたが、宝があるので滅ぼされませんでした。彼に関する限り、彼は四方から圧迫されました。しかし宝に関する限り、彼は窮しませんでした。一方では、死がありますが、もう一方では、命があります。一方では、わたしたちは絶えず死へと渡されていますが、もう一方では、わたしたちは命を生み出しています。一方では死が働き、もう一方では命が現れます。コリント人への第二の手紙第4章と第5章は、パウロの務めの中心を明らかにします。ここでわたしたちが見いだすのは死と復活の原則であって、他の何ものでもありません。わたしたちの中にあるものはすべて死であり、主の中にあるものはすべて復活です。

権威は復活がある所にある

もしわたしたちの中に何か権威があるなら、この権威は神から来るのであって、わたしたちからではありません。わたしたちは決して間違っはなりません。すべての権威は主から来ることを、わたしたちははっきりと見るべきです。わたしたちがこの地上にいるのは、ただ神の権威を保持するためです。わたしたちがここにいるのは、自分自身の権威を保持するためではありません。権威はわたしたちのものではありません。わたしたちは主に信頼するときはずっと、権威を見ます。わたしたちは天然の命を表現するときはずっと、他のすべての人と同じようになり、わたしたちの中には何の権威もありません。復活から出て来るものだけが権威という結果になります。権威は復活に基づいているのであって、わたしたち自身に基づいているではありません。普通の杖は神の御前に置くことはできません。復活の杖だけが神の御前に置くことができます。さらに、復活は、芽を出した杖に見いだされます。これは一般的な復活ではなく、完全な復活です。これは復活の命のかすかな表現ではなく、芽を出し、

花を咲かせ、実を結ぶ命です。これは円熟した復活の命です。復活の命の中で円熟した者だけが、神の代理権威として振る舞うことができます。復活の命がわたしたちを通して表現されればされるほど、わたしたちはますます権威を持つようになります。
(権威と服従、第 15 編)